



救ったのか



殺したのか

ロストケア

LOST CARE

松山ケンイチ 長澤まさみ

鈴鹿央士 坂井真紀 戸田菜穂 塚村リエ 加藤菜津 やす(ずん) 岩谷健司 井上肇

綾戸智恵 梶原 善 藤田弓子

柄本 明

監督:前田 哲「そして、パトンは渡された」「こんな夜更けにバナナかほ愛しき実話」

原作:薬真中 顕「ロストケア」(光文社文庫刊) 脚本:龍居由佳里 前田 哲 主題歌:森山直太朗「さもありなん」(ユニバーサル ミュージック) 音楽:原 摩利彦

製作幹事:日活 東京テアトル 配給:東京テアトル 日活 製作:「ロストケア」製作委員会 制作プロダクション:日活 ドラゴンフライ ©2023「ロストケア」製作委員会

2023
3.24
ROADSHOW



彼はなぜ

42人を殺したのか

ロストケア

LOST CARE

松山ケンイチ 長澤まさみ

鈴鹿央士 坂井真紀 戸田菜穂 塚村リエ 加藤菜津 やす(ずん) 岩谷健司 井上肇

綾戸智恵 梶原 善 藤田弓子

柄本 明

監督:前田 哲「そして、パトンは渡された」「こんな夜更けにバナナかほ愛しき実話」

原作:薬真中 顕「ロストケア」(光文社文庫刊) 脚本:龍居由佳里 前田 哲

主題歌:森山直太朗「さもありなん」(ユニバーサル ミュージック) 音楽:原 摩利彦

製作:島田聡一郎 太田和宏 堀田雄志 池田家洋 武田貴士男 エグゼクティブプロデューサー:福家康孝 新井博晴 プロデューサー:有重陽一
ラインプロデューサー:鈴木嘉弘 アソシエイトプロデューサー:松岡明彦 池田地 保 海部:坂倉陽子 原野:森川雅範 美術:後藤レイコ 衣裳:荒木里江 ヘアメイク:水田真穂子 装飾:船場裕輔
音楽統括:日根直 録音:小沼大輔 音響効果:赤澤 幸二 編集:高橋 幸 VFX:ルーパー・バイパス 監査:佐藤正晃 助監督:土岐洋介 キャスティング:山下葉子 制作担当:村上俊輔 松村隆司
製作幹事:日活 東京テアトル 配給:東京テアトル 日活 制作プロダクション:日活 ドラゴンフライ 製作:日活 東京テアトル 東映ビデオ 東宝映画 光文社 ©2023「ロストケア」製作委員会

2023
3.24
ROADSHOW

殺人犯VS検事 運命の激突

緊迫の対決、明かされる衝撃の真実、そして…慟哭のラスト15分。

松山ケンイチ×長澤まさみ
初共演の二人が入魂の演技で激突する
社会派エンターテインメント

日本では、65歳以上の高齢者が人口の3割近くを占め、介護を巡る事件は後を絶たない。この問題に鋭く切り込んだ葉真中顕の第16回日本ミステリー文学大賞新人賞受賞作を、「こんな夜更けにバナナかよ 愛しき実話」「そして、バトンは渡された」の前田哲監督が映画化。介護士でありながら、42人を殺めた殺人犯・斯波宗典に松山ケンイチ。その彼を裁こうとする検事・大友秀美に長澤まさみ。社会に絶望し、自らの信念に従って犯行を重ねる斯波と、法の名のもとに斯波を追いつめる大友の、互いの正義をかけた緊迫のバトルが繰り広げられる。他に鈴鹿央士、坂井真紀、戸田菜穂、藤田弓子、柄本明といった実力俳優が出演。現代社会に、家族のあり方と人の尊厳の意味を問いかける、衝撃の感動作だ！



映画「メンター」Lilico



本当に国が抱えているシビアな社会問題と人間が心の奥底に秘めた罪悪感のリアル。どんなに尽くしても、どんなに頑張っても、例えどんなに嫌いになっても無視したとしてもこれで良かったのか？の気持ちで自分とともに生きつづける。**綺麗事を並べて、自分の気持ちを押し殺して、身体と心が張り裂けそうになる。**家族の絆と苦悩は他人にはわからない。何が正解なのかもわからない。心の雄叫びが俳優みんなから溢れて…見終わってから自分の心と向き合うことすらちょっと怖くなるテーマをこんなエンターテインメントに仕上げられたのがすごい！
やられた…



【証言】
私は42人を救いました。



主題歌 森山直太郎
「やもあらなん」

前田監督からお話をいただき「さもありなん」という曲ができました。介護という一つのテーマでも生きている人の数だけ無数の問題と途方もない答えがあって、何が善で悪なのかはそれぞれ倫理観、置かれている立場によって異なります。**大切なのはその「異なり」を寄り添い見守ること。**是非か、ありか無しかを問うより無意識の視点で相手の想いを感じる。『さもありなん』はそんな普通の優しさから生まれた一曲です。泡と化する宇宙の言葉。境のない世界になることを願いながら。



「ロスト・ケア」 著者 葉真中顕

最初は映画化は難しいのでは
と思っていたのですが、まったくの杞憂でした。原作を大友と斯波の対決を中心に据えた人間ドラマにアレンジすることで、核となるテーマを見事に描ききった前田哲監督ほか、スタッフ、キャストのみなさん、松山ケンイチさんと長澤まさみさんの発するセリフのひとつひとつが、観る者への問いかけのようで、**原作者という立場を忘れて見入ってしまった。**熱演をしてくださったことに感謝申し上げます。最注目抜きに素晴らしい作品になったと思っております。



彼はなぜ42人を殺したのか。
早朝の民家で老人と訪問介護センターの所長の死体が発見された。捜査線上に浮かんだのは、センターで働く斯波宗典(松山ケンイチ)。だが、彼は介護家族に慕われる献身的な介護士だった。検事の大友秀美(長澤まさみ)は、斯波が勤めるその訪問介護センターが世話している老人の死亡率が異常に高く、彼が働き始めてからの自宅での死者が40人を超えることを突き止めた。真実を明らかにするため、斯波と対峙する大友。すると斯波は、自分がしたことは「殺人」ではなく、「救い」と主張した。その告白に戸惑う大友。彼はなぜ多くの老人を殺めたのか？そして彼が言う「救い」の真意とは何なのか？被害者の家族を調査するうちに、社会的なサポートでは賄いきれない、介護家族の厳しい現実を知る大友。そして彼女は、法の正義のもと斯波の信念と向き合っていく。

なぜ？42人も殺した男の動機に心動かされるのか？なぜ？追い込むはずの検事が、この男に追い込まれてゆくのか？そして、なぜ？空前絶後の大量殺人に涙してしまうのか？答えは、すべてこの映画の中にある。**絆は呪縛…**そう言われて、あなたはどうか感じるだろうか？他人事じゃないすべての人に当てはまる。これは、あなたとあなたの家族の物語。

フリーアナウンサー 笠井信輔



社会福祉を研究する立場として拝見し、素晴らしい映画だと思いました。介護をしていく上で直面するさまざまな困難、そして**社会から孤立し追い詰められていく**様子がとてもリアルに描かれています。また、介護を受ける本人の苦しみも描かれており、多く裁判を見てきた私にとってはまさにその通りと感じる描写でした。この作品のテーマは「なるべく目を背けていたいこと」なのかもしれません。しかし今の日本が直面している重要な社会問題であり、介護は誰もが少なからず関わることであります。ぜひ多くのみなさんにこの映画をご覧いただき、「自分だったらどう受け止めるか」を考えるきっかけにしてもらえたらと思います。

日本福祉大学社会福祉学部教授
社会福祉学博士
日本福祉大学ソシヤル
インクルージョン研究センター長
湯原悦子



ミュージックカード
オリジナル
クリアファイル付き
ミュージックカード
前売券 発売中
1,500円(税込)
※クリアファイルはA5サイズです。
※数量限定 ※一部劇場を除く
※詳細は作品公式サイトページをご覧ください。